
幼なじみと俺と 15 禁版

出下夕御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみと俺と 15禁版

【Nコード】

N56110

【作者名】

出下夕御

【あらすじ】

幼なじみとの恋愛みたいなものを兼ねて、作成しました。十五禁版です

俺の名は加々美結城。普通の高校生だ。

俺の住む町は、ただ何とも無い普通な町だ。あるのは、樹齢三百年を超した木や、畑を耕す近所のおじいさんおばあさん達、そして未来を育む為に成長していく俺達若者達だ。

ある土曜日。俺は不愉快な起床をするハメになる。

今日は休日だし、遅く起きようといまだ熟睡中の俺。休みの日は、こうやってゆつくりと過ごすのは、この上ない幸福だ。それが…。

ドタドタドタドタ……

ガラッ

「ゆう君オハヨー！」

「……」

当然俺はまだ眠っているから、俺を呼んだ奴の声は聞こえて来ない。

俺を呼んだのは、幼なじみの照井澪。家はお隣りで、俺の部屋の窓を開ければ、彼女の部屋の窓が目の前にある。同じ高校の同じクラス。容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能と三拍子揃っている。しかし、成績とスポーツは俺の方が上なのだ。ここだけの話、彼女は学校一の体型だ。

「ゆう君！起きなよ！」

何故俺が彼女に起こされなければならないのだ？平日なら構わない。俺は朝は滅法弱い方だ。その俺を、毎朝起こしてくれるのは、有り難い事だ。

「もう！起きないなら、やっちゃんもん！」

「！！」

俺は突然なことで目を覚ました。彼女の唇が、俺の唇を覆う。この行為は、俺が彼女から四歳の頃からずっと続いている。俺としては有難迷惑な事だ。

「何すんだ！」 俺は彼女から放れて、怒鳴る。

「だってえ、ゆう君起きないんだもん」

「だからって、限度があるだろう？」

「気を付けまーす！」

俺が言った言葉に、あどけた口調で答える漑。その仕草が、ここ最近眩しく思える。

俺は彼女がこんな朝っぱらから、何しに来たか尋ねた。一つは俺を起こしに来た事だ。

「忘れたの？家のパパとママが結婚記念の旅行行ってるんだよ。しかも今はインドだって」

「で、朝飯を頂戴しよう？」

「うん」

俺は内心呆れた。仕方の無い事だ。彼女の作る料理は、お世辞でも美味しいと言えない。

「コーヒー付きならいるか？」

「うんいいよ」

「取り合えず、部屋から出るよ。着替えるから」

「えーっ？いいじゃんいたって」

「朝飯がほしけりや、俺が着替えるまで入るんじゃねえ！！」

俺は漣を部屋から追い出した後、さつさと着替えた。ついでに言うが、俺の両親は海外で仕事をしている。親父はコロンビアでお袋はネパールにいる。

部屋を出て、漣と合流した俺は台所へ向かった。夕べの内に仕掛けた米は、ふつくらと炊いてある。味噌汁は、夕べの残りの青野菜の味噌汁にする。献立は、この前近所のおばさんから頂いた煮豆ときんぴらだ。

朝食が終わると、漣が俺に声をかけた。

「ねえ、ゆう君」

「何だ？」

俺はそっけなく答えた。

「今日さ、何処か行こうよ！」

「何処に？」

「ちよつと買い物。だつてゆう君の私服少ないもん」

「は？ちよつと待て、お前が何か買いたいからいくんじゃねえのか？」

「だつてゆう君、自分の服に関してさあ、疎いじゃん。同じクラスの男だつて、カジュアルな服装じゃない」

「生憎だが、俺は服装を乱すのは嫌いだ。尚且つ、俺の欲しい服は俺が買うから結構だ」

俺が言った後、漑はシュンとした顔で俯いた。こういう世話焼かせな所が、またいいと思う俺だが、時によってちよつとウザく感じる。

「ゆう君と行きたかったなあ……」

途端に、漑は俺をうるうるとした目で見ていた。この目に俺が勝った事は無い。

「分かった！分かったから！俺行くよ」

「ヤッター！ゆう君とデートだぁー！」

言い忘れたが、俺と漑は恋人同士だ。が、それは漑が強制的にそ

うさせたのだ。俺の嫌いな教師の火山史和よりも厄介この上ない。
しかし、何故か、拒否感が無いから否定もしない。

「行くんだったら、そろそろ行くぞ」

「あ、待つてゆう君。私着替えて来るから」

それから、何分間俺は待った事か。しばらくすると、家で見たのとは違う服装だった。それに俺はつい見とれてしまった。膝より長いスカートに、白いブラウスの上に赤いコートを着ていた。

「お待たせ！」

「おっ、おう。あんまし待つてねえから」

といっても小一時間位だった。

「それじゃあ、しゅっぱーっ！」

「しんこー」

自宅から目的のデパートまでバスで行くこととなった。この地域のバスは40分に一回でオールで運行している。こんな田舎にしては贅沢過ぎるのだ。

「ゆう君、さっきから何ぶつぶつ言ってるの？」

「あ……いや……何でもねえよ。心配すんな……」

「ならいいや。あ、でもさっきからさあ」

「何だよ…」

突然漣は俺の耳元に口を運び、開いた。

「さっきから私の体見てるでしょ？」

な、何故分かった？まあいい。取り合えず俺は答えることにする。

「べ、別にいいじゃねーか。悪いかな？」

「悪く無いもーん」

彼女の茶色の髪が、先程から俺の鼻に、甘い香りを出していた。

「お、そろそろ着くぞ」

バスは目的地に到着し、俺と漣はバスを降りた。

俺は漣に強制連行され、とあるショッピングモールに到着した。
しかし、俺はこの場所を知らない。

「そつえば、ゆう君ここ初めてだよな？」

「ああ、初めてだ。しかし客多いな、何かあるのか？」

「ここはね、本屋さんとか、CDショップとか、映画館とか、食べ物屋さんとか色々あるよ」

「外で見るより、結構広いんだな。こりゃ、迷いそうだな」

「昔みたいに迷子になんないでね？」

「だから、あん時はお前が迷ってただろ。『わーいウサギさん』『わーいかめさん』って着ぐるみ追っ掛けて、俺が捜すはめにもなったんだ」

以前…というか、ほんの一昔前だ。小学校の入学祝いに、俺のお袋と彼女のお袋さんとの四人で、デパートへ出掛けた時だった。

当時澪は無類の着ぐるみマニアだった。たまに遊園地で風船を持った着ぐるみさえも『やあだあ！お家にもちかえるんだもん！』と連呼していた。その癖があつてか、デパートで澪だけ逸れてしまったのだ。

そして見つかったのは、社員用の控室で石化していたのを、係りの人が見付けてくれた。

「ま、あん時の澪も可愛かったと思うな」

「もう、ゆう君つたらあ！！」

「馬鹿！でっけー声出すなよ。……他の男がお前に注目しちまうだろ？」

「そんな事無いもん。ゆう君が1番だもん」

まあそんなこんなで、目的を果たした俺達は帰り道を歩いていた。すると、澪が口を開いた。

「ねえ、ゆう君」

「何だ？」

俺は素っ気なく漣に返事をした。もう日は傾いていて、周りももう真っ暗になりつつあった。

「きょうさー」

じれったく漣は俺に言う。まだあどけなさが残る彼女の顔が、いつの間にか俺の目の前に現れた。

「私の服を見て、なあに考えてるのオ？」

「おまつ、まだそんな事言いやがって！」

「もしかして、えっちい事考えてたでしょ？」

「ばっ、バカヤロー！」

「ゆう君だったらいいよ」

「何がいいんだよ？」

俺は漣に、何がいいのか尋ねた。すると漣は、頬を紅くして、俺に言った。

「私の全部、ゆう君にあげるよ」

「お前、それ本気^{マジ}かよ」

「それに今夜、ゆう君と同じお風呂に入りたいし、同じお布団で寝たいなあ／＼／」

「……………」

俺は、啞然とした。まさか、あの漑が漑で無くなっていた。いわば新しい漑だった。

「俺で、いいのか？」

俺は、心の裡で考えて、紡いだ言葉を発した。つまりは……。

「いいよ」家においでよ、どうせパパとママは帰ってこないんだし。なんなら……………」

「断る……………」

「…ふえ？」

漑の誘いを断った俺は、真っ先に家に急いだ。彼女も遅れまいと俺の後を追う。もう日は沈み、空には星が散らばっていた。家に着くと、飯も喰わずに部屋に急いだ俺は、自分のふがいなさに絶望した。何故ちゃんとOKしなかったのか…。

「馬鹿は俺だ……………」

朝から敷いたままの布団になっところだった俺はそう呟いた。何やってんだよ俺。

そんな時、部屋の窓が開いた。顔を傾けるとそこには…。

「ゆう君！晩御飯ちよーだあい！！」

そういえば、ここは2階だ。彼女は、澪は自分の部屋の窓からこ
つちに來たんだろう。

「……あ？」

「だあかあら。晩御飯ちよーだい」

何故急に晩飯をせがむのだ？それに、俺はとても疲れているんだ。

「疲れてるのは、私も同じだよ」

「人の心の中を読むなよ。つか、米は炊いているんじゃないのか？」

俺は澪にそう言ったが、否定するかのように、首を横に軽く振つ
た。

彼女は目を閉じ、唇を差し出した。これは、もしかして…。

「……俺からのが、欲しいのか？」

澪は肯定するように首を縦に振った。

俺は、自ら鼓動を確かめながら、俺の唇を彼女に差し出した。俺
からの初めてのキスだ。

「ん……ちゅ……れろ……んん……／＼／」

互いの口の中から舌が絡み合う水音がいらしく聴こえて来る。
これが澪が欲していた晩飯。俺からのキスという名のメニュー。
暫くして、俺達は唇を離れた。互いを見つめ合う視線は、熱かつ
た。

「えへへ。ゆう君だいたーん／＼／」

「漣のがうつったんだよ／＼／」

暫くして、冷静になった俺達は暗くなってる部屋の中で、見つめ合っていた。時計の針が聴こえる程の静寂さが、今の俺に染みる。

「つか、何で来たんだ？」

俺は漣にここに来た理由を聞いた。彼女は俯いて答えた。

「だって、ゆう君が冷たくしたから……」

俺が漣の誘いを断ったあの時を理由に、俺の部屋に侵入したのだろつ。

「何で冷たくしたか、分かるか？」

彼女はわからないと言うように、首を横に振った。

俺は彼女を抱いて、その本心を語った。

「あん時のお前が、お前が自分に素直じゃなかったからだ。無理しなくていい。無理しなくて……いいんだよ」

「ゆう……君」

彼女は、無理を辞めたのか俺の胸に沈んだ。

気付けば、9時を充分に過ぎていた。俺は風呂に入ろうとしたが、漣が俺の服の袖を掴んでいた。

「そんなに……俺と入浴りたいのか？」

彼女はコクンと頷いた。

「でもちよつと待ってて。家から道具持ってきて来るから……」

「ああ。早くしろよ？」

それから10分後、彼女は自分のパジャマと代えの下着一式が入っているだろう、袋が見えた。

先に俺が湯舟に浸かる。今思えば俺は、彼女と一緒に風呂に入った事が無い。近いと言えば、普通にプール位だ。

そういえば昔彼女のお袋さんから聞いた事があった。漑は親父さんと入るとき、無意識に俺の名を呟きまくっていたそうだ。っていう事は、彼女の願いが今叶ったって訳か？

「ゆう君、入るよー」

俺の考えが遮断されて、漑が何も巻いてない産まれた時と同じ恰好だった。

当然、エロに耐性が無い俺は慌てて目を逸らす。

「ば、バカヤロー！何か巻けよ！！」

「だってゆう君と密着したいんだもん」

と言いつつ漑は俺の入浴っている浴槽に入浴つて来た。背中合わせではあるが、直に彼女の体温が感じられる。

「ゆう君の背中って、大きいなあ」

「高校生なら当たり前だろ？それに、もう子供じゃねえんだ」

「へえ」

すると、俺の背中合わせになっている漣は、俺の背中に身を任せ
た。彼女の重みが、体中にひしひしと伝わって来る。

「ほんとうに……大きい。パパよりも固あい」

俺の背中を、自身の父親と重ねて比較する漣に胸が、俺の背中に
密着されていた。……柔らけえ。

「（やべえ！俺の背中に、漣の胸がああ／＼／＼）」

「ねえ、ゆう君」

「なっ、何だよ？」

「背中……流しても……いい？」

「今、なんて？」

俺は彼女の発した言葉の意味が、一瞬分からなかった。しかし、
ほんの数秒間の内に理解した俺は、何故か快く了承した。

一旦浴槽から上がると、いつの間にか泡を用意していた漣が俺を
座らせて、背中を洗っていた。

「気持ちいいな」

最初の感想が良かったのか、喜んでいたのが鏡に写っているのが分かった。とても眩しい笑顔と共に、二つの大きな実が揺れていた。その先にあるピンクのモノも見えた。

「はい。前は自分でやってね」

「あんだよ、やってくれんじゃねえのかよ」

「男の子のアレ（・・）なんて、見たく無いんだもん／＼」

澪の言ったアレを彼女は指差し恥ずかしい顔で言った。俺の分身が固くなって立っていた。しかし、タオルでは隠していたが、一部が盛り上がっていた。

「いくらゆう君でも、ソレは余り触りたく無いな」

「お前は自分の事が言えるのか？」

俺の言った事に気付いた澪は、己の股間と胸を慌てて隠した。しやがんだつもりだろうが、俺にはギリギリ見えてしまう。

仕方なく前は自分で洗い、シャワーを使って体中の泡を流した。もう一度湯舟に浸かったと同時に、澪は自分の体を洗っていた。

「み、見ないですよ？」

「あんでだよ？」

「いくらゆう君でも、見られたく無いんだもん」

何なんだその理屈は。

「あゝ、分かった分かった。見ないから安心しろ」

適当に答え、ハンドタオルを顔に被せた俺は、何故か彼女をいやらしい様に扱う様が見えてしまった。何故だ？俺はエロに耐性が無いハズだが……。

「ゆう君」

「何だ？」

体を洗っている最中の濡が、ハンドタオルで顔を隠した俺に声をかけた。

「今の私をオカズに、えっちい事考えてたでしょ？」

「ばっ、何言ってるんだ！んな事ねーよ！」

まあ俺の頭の中を聞き取りやがった。こいつはエスパーか何か？！

「凶星だねえ？」

「うッ！」

否定は出来なかった。俺は目隠しで見えなかったが、多分謙遜してるかにやけているに違いない。

暫くして、濡も浴槽に入浴って来た。

「ねえ、ゆう君」

「何だ？」

「私ね、今夢が……叶ったんだ」

「どんな夢だったんだ？」

答えを知っている俺は、敢えて知らないフリをして尋ねた。
すると澪は俺の首に手を回し、言った。

「ゆう君と……ううん。やっぱり何でも無いよ」

「何だよソレ……」

そしてまた俺達は、唇を重ねた。今度は、舌を入れずにお互いの
感覚が伝わる様に。

風呂から上がると、もう10時を指していた。

「何もすることねーし、寝るか？」

「ええ……？もう寝るのオ？」

澪は残念そうな顔で俺を見ていた。止めてくれ、そんな目で俺を
見るんじゃないよ。

「まだ眠たくなあい！」

白いパジャマを身に纏った彼女は、わがママを言って俺を困らせ
た。

「言うこと聞けねえなら、別々で寝るか？」

「それだけは止めて！ゆう君と一緒に寝たいモン！」

「じゃ、とつとと寝るか」

部屋に入り、布団に潜った俺達は、何故か背中合わせで寝ていた。しかし、まだ俺だけは、目が覚めていた。

対する彼女は、心地好い寝息を立てていた。

フと振り返ると、彼女は仰向けで熟睡していた。ただ、ある一部がとても言っている程膨らんでいた。

「（やべえ！これは反則級だろうが！！）」

因みに、これは後で知ったことだが、彼女はG位だと言う。つられて俺も仰向けの体制に代えると同時に急に睡魔に襲われた…。

明くる朝。漣は俺よりも早く起きて俺の唇を覆った。

「おはよ。ゆう君」

「ああ。おはよ」

何故か今日の目覚めのキスが、俺の至福と化していた。気が付けばもう、俺達はただの幼なじみじゃ無くて、もう恋人同士になっていた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5611o/>

幼なじみと俺と 15 禁版

2010年10月29日00時40分発行